

お母さん、お父さんになるって…

ねらい

身体の中に自分のものでないもう一つの鼓動が聞こえた時の感動、激しい陣痛の末、生み終えたあのときの安堵と喜び…覚えていますか？

生みの親にはなったけれど、育ての親になるために大事なことは何か考えてみましょう。

方法

① 学習のねらいを話す。

《例》 みなさん、お子さんを出産されたときの感動を覚えていらっしゃいますか？
覚えているけれどそれどころじゃない！ 大変な毎日でしょう。かわいい我が子が時には疎ましく思えるようなこともあるのが子育ての現実です。

しなければならぬことは山ほどありますが、あれもこれも…と思わずに、本当に大切なことは何かを一緒に考えてみましょう。

② 題材の絵本を読む。

【内田麟太郎 『おかあさんになるって どんなこと』 PHP研究所】

③ お母さんになって「今、大事にしていること3つ」をワークシートに書く。

④ グループを作り、グループ内で書いたものを交流する。

なぜ大事にしているのか、理由も添えて交流する。

⑤ グループ内で交流し合ったものに、優先順位をつけてみる。

(個人によって優先順位は違うので、一致した意見でなくてもよい。)

⑥ 各グループの意見を発表し合う。

効用

子育てにはいろいろな仕事があること。また、いろんな考え方があること。誰にも悩みがあり、工夫があること等を知ることができます。

父親と協力してできること、どちらがしてもよいこと、母親にしかできないことに気付くことができます。『なんで私が…』から『私だからできるのよ』と子育てに前向きになれるかも知れません。



<ワークシート>

お母さん、お父さんになるって…

- * 毎日お父さん・お母さんとして頑張っていらっしゃる皆さん、「私はこんなことに心がけている」「こんなことを頑張っている」ということを3つ書いてみましょう。

①

②

③

- * 書いたものをみんなで交流し合い、共通項目を出してみましょう。

①

②

③

- * 発表者を決めて、他のグループとも交流してみましょう。

- ◆ 1人3枚短冊に書いて、場面ごと、項目ごと、子どもの年齢ごとなどに分類しながら貼っていき、すべての意見を無駄にすることなく整理するのもいいでしょう。

< 資 料 >

『お母さんになるってどんなこと』

内田麟太郎 作

ミミちゃんの おかあさんと
ターくんのおかあさんが いいました。
「ふたりで あそんでも いいわよ。」
「はい」 ふたりは かけだしました。

そして たんぽぽの まんなかに すわると
ミミちゃんが いいました。

「わたし きょうは このこの おかあさんになるの。」
「おかあんになるって……、どんなこと？」
ターくんは ききました。
「おかあさんになるって、 こどもの なまえを よぶことよ。」
ミミちゃんは きのしたまで かけていき
こどもの なまえを よびました。
「モコちゃーん、こっち おいでー。」
「はい。」 ターくんは モコちゃんを だいて はしりました。

「それから？」
ターくんは ミミちゃんにききました。
「それからねえ…」
ミミちゃんは くびを かしげ いいました。

「こどもと てを つないで あるくことよ。」
さんには てを つないで あるきました。

「それから？」
ターくんは また ミミちゃんに ききました。
「それからねえ…」
ミミちゃんは くびを かしげると いいました。
「しんぱいすること。」
「まあ おねつがあるわ。」

ミミちゃんは しんぱいそうに モコちゃんのおでこに
じぶんの おでこを くっつけました。

「だいじょうぶです。 おかあさん。 すぐに なおります。」
ターくんは おいしゃさんになり モコちゃんに おくすりを のませました。
でも モコちゃんのおねつは さがりませんでした。

「モコちゃん… モコちゃん…」

ミミちゃんは モコちゃんのおでこを ひやしつづけました。

それでも モコちゃんのおねつは さがりませんでした。
ミミちゃんは ひとばんじゅう ねないで かんびょうしました。

あさになり モコちゃんのおねつは やっと さがりました。

「モコちゃん…」

ミミちゃんは おもわず モコちゃんを ぎゅっと だきしめました。

「よかったね モコちゃん。 よかったね モコちゃん。

おねつが さがって よかったね。」

ミミちゃんは おもわず なみだも ながれていました。

「おかあさんになるっていうことは……」

ミミちゃんは いいました。

「しんぱいして おもわず ぎゅっと だきしめて

おもわず なみだが できることよ。」

「そうみたいだね。」

ターくんは うなずきました。

そのとき。

ふたりの おかあさんが ふたりを よびました。

「ミミちゃーん。」

「ターくーん。」

「はーい。」

ふたりは かけていきました。